淫虐の書

Deisui Oukoku PRESENTS. No19
Maruto!

最初は自慰の延長くらいに思っていた。

図書室の倉庫で見つけた古淫書。
それによると”人でなし”との交わりは
人知内では味わえない官能的な欲望を満
たすらしい。

”人でなし”の召還に必要なのは
書き記された呪文の詠唱

そして…

スルッ

淫汁の混じる”純潔の証”を
書にしたためる事。

ハァ…

ハァ

チュッ

プチュッ

「ん…」
深更の密閉された図書室倉庫に
私の体液が滴る音が反響する。

ドロッ

ハァ…

その途端に冷たかった部屋の空気が
獣の体温へ一変した。

ハァ

淫汁の混じる”純潔の証”を
書にしたためる事。

ハァ…

ハァ

チュッ

プチュッ

「ん…」
深更の密閉された図書室倉庫に
私の体液が滴る音が反響する。

ドロッ

ドロッ

霧のようなモノが固まりやがてそれは
巨大なイソギンチャクのような姿になった。

ハァ…

ハァ

「これが”人でなし”…」
これから”彼”と交わり犯される…
溺れる快楽の事を考えると、その姿に
恐怖は感じなかった。

「ひゃっ！」
彼の感触は柔らかく、でもブニブニと重さと肉厚のある生暖かい巨大なナメクジのようだ。ずるりと素早く私の両手足を捕らえ、私は身体の自由を奪われた。

ニュル…

ニュル…

ニュル

あ…

ハァ…

ハァ

彼に瞳や口がが存在するのかは判らない。けれど剥き出しのお尻やあそこに視線と吐息のようなものを感じる…。

「ひゃっ！」
彼の感触は柔らかく、でもブニブニと重さと肉厚のある生暖かい巨大なナメクジのようだ。ずるりと素早く私の両手足を捕らえ、私は身体の自由を奪われた。

「ふあぁ…」
ディルドが抜かれた瞬間、あそこに直接生暖かい空気を感じた。

広げられた両足の間から糸を引くソレを見ると今更恥辱に頬が染まってしまう。

「ひゃっ！」
彼の感触は柔らかく、でもブニブニと重さと
肉厚のある生暖かい巨大なナメクジのようだ。
ずるりと素早く私の両手足を捕らえ、私は身体
の自由を奪われた。

ずるりと現れた”彼”は私の手足を捕らえている
モノとは違って突起がある逞しい”彼”だった。

透けて見える伸縮を繰り返す無数の管。
それらは開口部からツンと匂う汁と共に
舌のようにチロチロと踊っている。

「あ…」
私のあそこを眺め舌なめずりをするような
”彼”を見て少し怖くなる。
「待っ…！」
思わず叫んでしまうが”彼”はそのまま…

「んあぁぁぁあっ」
裂かれる寸前まであそこが広がり
”彼”の極太肉傘が入ってくる。

「ふ…深い！深いいぃ！」
膣壁を掻き分けながらそのままゴスンと
子宮口に当たる。
「…！」
衝撃に串刺しにされたまま意識が飛び
かける…とその瞬間肉傘が子宮口を咥
え、異質な感覚に意識が引き戻された。

「あふぅっ、ふっ、ひぁっ」
子宮口を咥えたまま伸縮を勢いよく繰り
返し、膣口の間からブジュブジュと白い
泡が吹き出す。

「んくっ！んっ、あうっ！」
身体が浮くほど激しく暴れ回る極太肉傘。
そのたびに溢れ垂れる粘汁が尻、肛門を
撫で、腰、背中へ流れていく。

「ふあ…」
いつのまにか周囲は触手で溢れ
もはや部屋と”彼”の境界が判別
できなくなっている。
”彼”…触手達は皮剥きのように
服を剥ぎ、全身をまさぐり始めた。
触手達は柔らかい…胸をグニグニ
と縛り弄ぶ。
「うくぅぅっ！」
自分の体液と這いよる粘液の跡が
混じり合い、全身をヌラヌラと淫
らに照らし包み込む。

開脚され子供が排泄を強要させられているような恰好で掲げられる。
「やあぁ…」
縛られ上向いた乳房の間から股間を覗き見ると
普段慰めている自分の指や先程のディルドとは
比べものにならない太いモノが出入りしている。
「あふっ…あっ、す…凄い…凄いいっ」
自分の中を出入りしている極太肉傘を見つめていると
中で子宮を甘噛みしたままの先端部分が新たな淫責め
を開始した。
「んあっ！？ うくぅぅぅあぁぁっ！」

開脚され子供が排泄を強要させられているような恰好で掲げられる。

おっ!!

子宮を甘噛みした極太肉傘の口から、蠢く管達が一斉に子宮内に飛び込んでいく。
「嘘ぉ！…入ってくるっ！お…お腹がぁ！

やっ！

やあっ！

あッ!!

ゴッ

ゴズッ

内へ侵入を続けながら極太肉傘もさらに深く深く入り込み子宮をグリグリと押し上げていく。
「無理！もう入らない！入らないからぁ！」

ビュッビュルッ
隙間無く詰まった陰部から逃げ出すように淫汁が噴き出されていく。

「うくあぁぁ！イくぅ…イくぅぅっ！」
ブクンと極太肉傘が膨れ全ての管から
一斉に熱い液が流し込まれる。
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビュルルルッ
ビュルルルッ
ビュルルルッ
「あつぃ…！おまんこ…あついのぉ…！」
ブシュッビュッビュッッと熱い液体を子宮に
浴びて一気に絶頂に押し上げられてしまう。
床に吹き出し溢れ出た淫液が溜まり、絶頂で
身体が震えるたびにビチャビチャと音を立て
た。

あ…
「あ…おしっこ出ちゃ…う…」
痙攣に合わせてジャッジャッと淫汁と共に断続的に噴出した尿が、弛緩と共に音を立ててだらしなく出続ける。
ハァ
ハァ
ハァ
ジョッ
ジョアアア

ズルン
「あ…嫌ぁ…」
極太肉傘が抜かれ膣口から
煮えた淫液が流れ出した。
まだ満足できない貪欲な陰豆
は勃起し、膣口はパクパクと
痙攣し続けている。
大開脚され晒された陰部は
物欲しそうに口を開け、涎
のように溢れる淫液は肛門
を伝い床に染みを作り続け
る。
ヒク
ヒク
ゴプ
それを察したのか極太肉傘は
再び体内に身を納めはじめた。
「ふあぁぁぁぁ…」

やぁ…
ヒク
ズズ…
再び極太肉傘を体内に受け入れた後
もう一本目立つ突起の触手が近づい
てくるのが見えた。
「あふぅ…んぁ…？」
ヒク
ヒク
ヒク
ヒク
ズチュ
ズチュ
臀部を支えていた触手が尻を押し広げ、肛門が晒
け出される。肛門に狙いを定めた触手のゆるゆる
とした息…のようなものがあたり、ぞくりと恐怖
に怯える。
「…そんな…嘘ぉ…」

ズブゥ…ゴポッ…ゴポッ
「うあぁぁぁあああぁっ！
嫌ぁ！入って…入ってくるぅ！」

ミチッ
ギチッ
ミチッ
ギチッ

ズブッ
ズブッ

！

あ
やぁあぁぁぁ！

ズブッ
ズブッ
ズブッ

「く…苦しい…」
どこまでも深く深く侵入してくる触手に内臓を蹂躙される。
一瞬嘔吐感が襲ってきたが、再び子宮を淫略し始めた触手に
よって甘い感覚に脳を支配された。

「うあぁぁぁっ！凄いっ！おまんことお尻がぁ
…擦れて…熱いのぉ！」

「お尻い…おまんこぉ…
熱い…熱いよぉ…」
腸内全てが触手で埋まり、
そのまま口から這い出て
くるような、胎内全体が
犯される感覚。
膣内極太肉傘で満たされ
二本の触手責めに下半身
が淫らに跳ねる。

あぁっ!!

ズチャ
ズチャ
ズチャ
ズブッ
ビクッ

んぁッ!

「うあっ！…あっ…あひっ…！」
直腸をウニウニと練られ陰口は
極太肉傘が暴れ回り、再び子宮
に熱い白濁液が注がれていく。

ゴポッ
ゴポッ

膣口と肛門から飛び散る
淫液。それを吸って周囲
の触手が集まりだした。
「まっ…待って…駄目…」
入り込む隙間を伺うかのように
下半身に集まる触手に恐怖する。
「む…無理だから…やめ…」

「うぅ…はあぁぁっ！」
肉管達がムリムリと強引に肛門や膣口に入り込み陵辱を始めてくる。そんな身勝手な侵入者を歓迎するように、二つの穴から淫液腸液の飛沫を吹いた。
「ひあぁぁ！嫌っ！嫌ぁっ！」
激しく出入りする二本の太い触手。その隙間に這入る無数の肉管。淫核を咥え舐め上げ、尿道口に深く入り込む触手が雌を乱暴に嬲る。
子宮を犯す触手は脳を痺れさせ続け直腸を責める触手の挿送は激しさを増す。離れまいと雌の膣は必死に極太肉傘を包み込み、肛門は吸盤のように吸い続けた。

「ひあぁぁっ！あうっ！あんっ！んあぁぁ！」
直腸をこね回していた触手の先から熱い液が勢いよく注がれ始めた。
淫液に叩かれ続けている胎内の感触が交わり下半身の内部が緩い湯で掻き混ぜられているような感覚に陥ってくる。

ビュルルッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…

軽い絶頂感のまま翻弄されていると、不意に肛門を責めていた触手が引き抜かれた。
「…ひっ！」

ゴプッ！
ブチュッ
ブチュッ
ハァ…

ビクッ
ビクッ
耳を被いたくなる濁裂音と共に腸内に溜まっていた白濁液が肛門から放物線を描き吐き出される。
「いっ…いやぁぁぁぁぁぁっ！」
ハァッ…
ハァッ
ハァッ
ハァッ
ハァッ
ハァッ
ニチャッ…
内容物を吐き終えると一旦肛門は口を窄めるが、また物欲しそうに口を開き始めてしまう。
触手は再び尻を掴み、口を開けた肛門がクチャッと恥ずかしい粘音を立てた。
「あうぁ…うぁ…あぁぁぁぁぁ…」

ブジュッ…ズリュリュリュ…
再び腸内に侵入する触手。濡れた腸内は前よりも滑らかに奥底に侵入し、腸壁を嬲りながら再び液を射し始める。
ピシュッ…ブジュッ…ブリュリュュッ…
「もぉいっぱい…お尻もおまんこも、おしっこの穴も…みんないっぱいなのぉ…」
ぁッ
またッ！あふれちゃうッ！
ズズズズ…
ブリュ
ブジュ
んぁッ
あ…
「イってるのに…さっきからイキっぱなしなの…に…何か…きちゃうぅ…」
身体を犯している肉管全てがブワリと膨らみ一斉に濃厚な粘白液を吹き始めた。
「…！！」

「い…イくッ、イクぅッッ！
イクぅぅぅぅッッッ！」
ビュウウウウ！ビュルルルルッ！
激しい絶頂感に気を失いかけると
再び胎内で爆発するようにビシャ
ビシャと淫汁が注がれ意識が強制
的に引き戻される。
ビュッ
ドプッ
ビュッビュッビュッ
あ
ッ
いッ
イク
イクウ
いッ
！

「お豆もぉ…おしっこの…
穴も…おまんこも…お尻も
みんな気持ちいいいいい…」

ドプッ！ゴブッ！ゴボボッ！
強烈な連続絶頂の最中も注がれ
続ける淫汁で腹が膨らんでくる。

「入って…くる…
いっぱい…私の…中に…」

プチュ…
尿道口から水っぽい音と共に触手が抜かれ、それを合図に細い淫管達が離れていく。

太い触手達はまだ小刻みに震えながらポンプのようにピュルピュルと濃厚な液を出しけている。

ドク

はあッ…あ…

うぁ…

はあッ…

「おまんこが…お尻が…暖かい」

「んぁ…はぁ…ぁ…」
ようやく触手達の噴出も治まり
ずるりずるりと緩やかに優しく
内臓壁を撫でながら後退していく。

ジョッ…ジョロロロロ…
弛んだ尿道口からはしたなく迸る尿を
目にしながら深い闇へ落ちていった…。

ヤァァァァ

ブシャアァァァァ…
栓を失い胎内に収まりきらなかった粘白液が
自分の体内から吹き出す感覚で目を覚ました。

ブッ

ブッ

ビチャ

ブバッッ

周囲は静まり元の空間に戻っている。既に”彼”の気配は感じられなかった。

ハァ…

ハァ…

ハァ…

「はぁっ…はぁ…はぁ…」

絶頂の余韻でビクンと痙攣を繰り返しながら、弛緩した身体が吐き出すままに任せる。

だが腹の膨らみは収まる様子がない…。

「あ…」
お腹の中は”彼”の子なのだ。
「…動いた」
純潔の証はもう失ったけど
この子が生まれたらまたあの
快楽に溺れることができる。
「ふふっ…」
END.